

マダイ稚魚1000匹放流

すべい台で大海へ



すべい台で稚魚を小網代湾に放つ児童たち

海洋教育の一環に2日、小網代湾でマダイの稚魚が放流された。毎年、NPO法人小網代パール海洋隊（略称・小パール隊）とみうら学海洋教育研究所がタイアップしている。引率の先生を含め約40人の児童が滑り台のような『ウォータースライダー』を使い、約1000匹を放流した。二町谷埋立地にある「日本さかな専門学校」の生徒がバケツに稚魚を手際よく入れるなど放流をサポートした。

関係者によると、標識をつけたマダイが20年後に大磯で捕獲された例があり、繁殖されたマダイが最低でも20歳に達していたことがわかったという。小網代の森と小網代湾が密接に繋がっているとし、小魚の稚魚はアマモやカジメをゆりかごに成長する。海水温が上昇し、アマモやカジメが枯れてしまい、海底が砂漠化している。海藻の中には花が咲き、実をつけて増える種類もある。回復させるには時間がかかるが、再生は絶対必要だとよひかけた。

参加した児童は三崎小学

校3年生11人と名向3年生25人。三浦市のマイクロパスで小網代湾の岸壁に到着した後、神奈川県栽培漁業協会の今井専務理事から養殖漁業と栽培漁業との違い、磯焼けと防止策、稚魚放流の必要性などについてミニ講話を行った。今井専務は「小網代の森は海にとって大切な存在。アマモやカジメなどがアイゴやムササキウニの食害で姿を消している。小魚にとってアマモはゆりかごのような存在で、大きな魚に食べられようとする時、隠れる場所になる。放流した稚魚の約10%が漁業者や釣り人によって釣られる。放流する際には、元気に育ってねと願いを込めてほしい」などと解説した。

例会に報告した。研究所関係者によると、数年前から検討した課題で、今まで抜けてきた事業などは三浦市教育研究所に引き継がれる。

同研究所は平成28年3月設立された。同24年度スタートした海洋写真コンテストを引き継ぎ、同30年からは海洋教育のつどいを主催するなど、三方を海に囲まれた三浦との関わりを重視し、小中学校の海洋教育カリキュラムの開発とこれに基づいた海洋教育や授業の実践を支援してきた。



水槽で元気に泳ぎ回るマダイの稚魚